

26 唐獅子図 前田青邨 六曲一双

昭和十年（一九三五） 紙本金地着色 本紙各一〇三・一×四三三・八

三菱財閥の岩崎家より、昭和の大札を祝って献上された五双の屏風のひとつ。岩崎家に屏風の制作を依頼されたのは、前田青邨（一八八五～一九七七）のほか、川端龍子、楠木清方、橋本関雪、堂本印象という名だたる画家たちであった。完成した五双を見る限り、どのような絵を描くかは各画家の裁量に任されたものと思われるが、その中で青邨は王者の風格を持つ獅子をモチーフに選んだ。

かねてより、本図に描かれている二頭の子獅子が、依頼主の男爵岩崎小彌太が所蔵していた中国・唐時代の陶俑「三彩獅子」（静嘉堂文庫美術館蔵）をモデルにしたものであると指摘されているが、青邨は何枚ものスケッチを繰り返しながら、独自の造形感覚によってアレンジを加えている。そしてたらし込みの技法による表情豊かな線と、どっしりとした豊かな量感をもち、威風堂々たる迫力とどこかユーモラスな表情を併せ持った異色の唐獅子を生み出したのである。また彩色にも、青邨の鮮烈な色彩感覚が発揮されている。右隻の雄獅子は、金泥と切箔の上に金砂子を蒔いた黄金の体軀に、緑のたてがみが鮮やかな対比をみせる。対する左隻の雌獅子は、銀泥で着色されているように見えるが、銀が酸化して黒く変色することを嫌った青邨が用いたのは、実は当時珍しかった高価なプラチナの泥であった。岩崎家からの依頼ということで、金銭面の制約にとらわれず青邨は自由に新たなアイデアを試すことができたのである。古くより描き継がれてきた画題であるが、青邨は昭和という新しい時代を祝うのにふさわしい、それまでになく新しい唐獅子図を目指したことがわかる。

青邨はこの屏風を、懇意にしていた清元（浄瑠璃節の一派）の五代目延寿太夫の伊東にある別荘に籠って制作したという。名人の美声を聞きながら、部屋中に立ち込めるほどに金の砂子をふるい、自身も金粉まみれになりながらの制作だったと後年回想しており、作者にとっても非常に思い出深い作品だったようである。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

虎・獅子・ライオン

— 日本美術に見る勇猛美のイメージ

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 51

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十二年七月十七日発行

© 2010 The Museum of the Imperial Collections